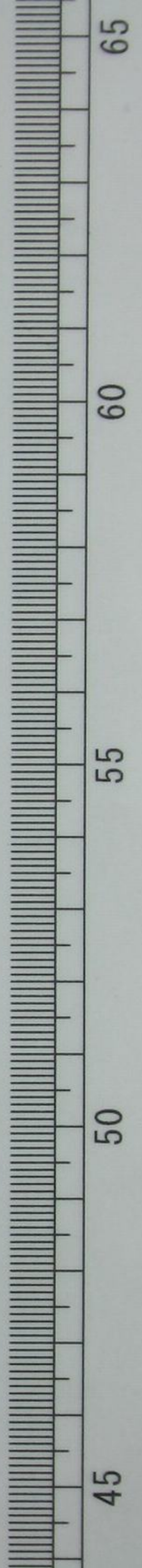


自記

三十一  
五

柳田文庫  
文庫11  
A1424  
1





特文庫11

A1424

1

48-8755



Blank page with a red border and vertical red lines for writing.



柳田泉文庫



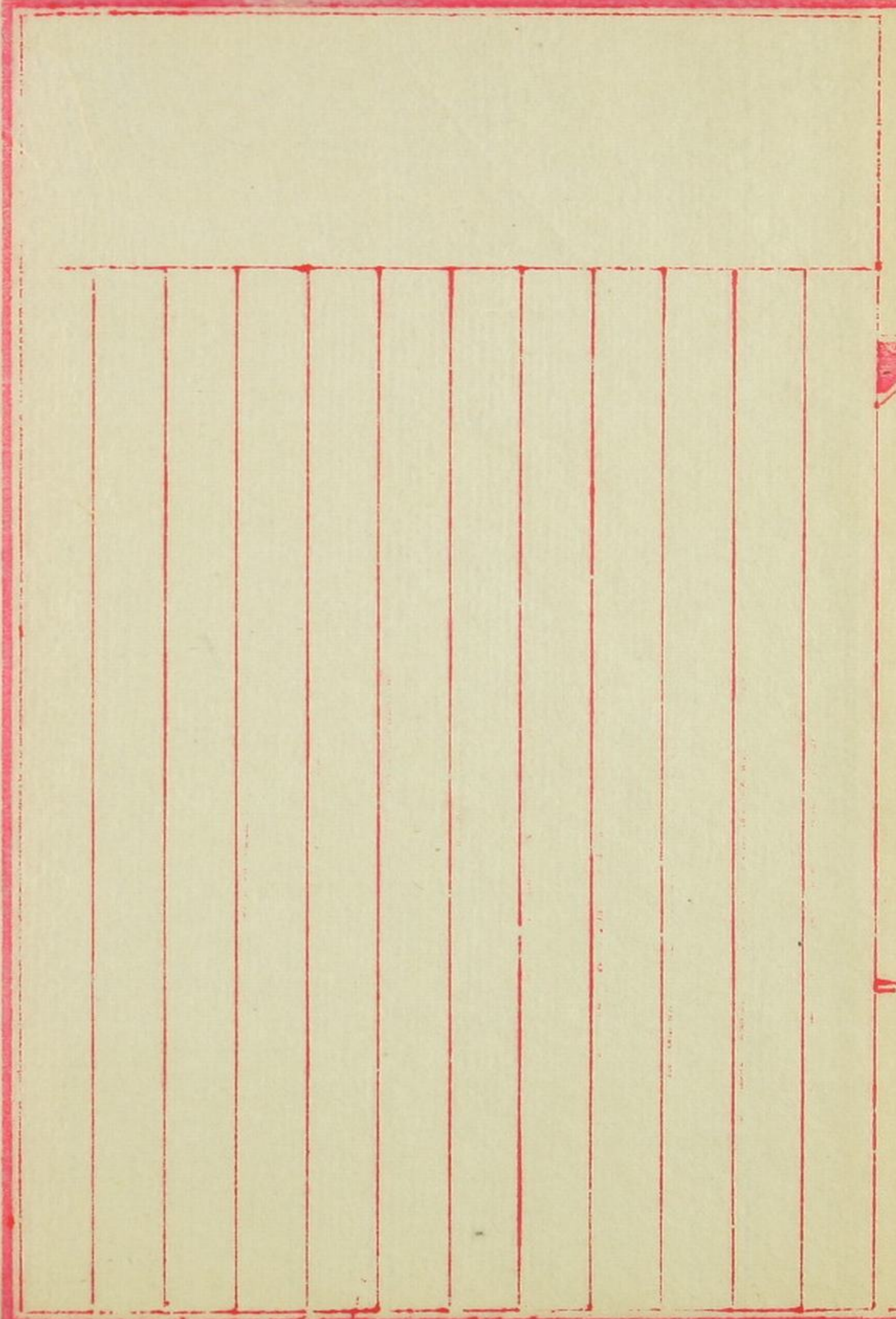




秀之說

江藤新平

非有先生倚几而坐，有童子遊樹下。先生曰：子自何來？童子曰：我自瀛洲。先生曰：瀛洲果可至乎？我想瀛洲久矣，子其為我導焉。童子曰：諾。乃駕雲乘風而至。于全世界是地也。花無落月無虧，風暖雲穩。左有連穰宮，室紫壇，砌堂靈瓊之美。右有金山銀峰玉樹，珠草之麗。前有白砂，郊原丘澤之廣。後有海濱百里，波濤縹渺之景。且有仙女數十輩，錦衣翩跹，各携鐘鼓，管箏洞簫。第之于殿，或吹或鼓，或弄音聲，錯々異









除日雪書似德安二姪

春濤

翁

朝書北窗壁，少如點星堂。雨雪霏々歲，云暮身為孤。  
旅心暗佛，是非八十勞。護責蓋關，駐馬逢韓相。飄然  
休道蹤未定，猶是故里非。他鄉玉梅，管銀海光。禁你  
欲再愛歐陽，騎驢已懶掉。舟懶只合懶，臥喜安杖梅。  
口噤竹身僵，老僧持尺坐。虛空老漁披，衰立寒塘。三  
衣客如遺，蝗不能蠕動。蒙雨霜明日，開啓天氣暖。雲  
霞出海椒，酒香。

鷓鴣步莊雅集次倭南韻

全

身履彷徨古湖陽，傍人先問有詩三。欲教鷓鴣鳥步吟  
社，便備蓑衣浪釣衣。斜日金山推歌響，歸牛度水笛  
聲。呼關未唱和，多佳句宜入張為主客看。

全次湘東韻

全

酒紅潮頰笑談間，應勝神仙藁駐顏。右現屠鴉鴿  
眼，室爐重炷鷓鴣斑。每題詩句巧而醜，及愛梅花痴  
不頌。江上月未渾未識，却從波底見前山。

全次瘦石韻

全

虽云身跡類梁鴻，氣與元龍略約同。江上飛樓依水  
月，山中層閣似松風。人心取々官三黜，世事悠悠眼  
一空。誰為先生營壽域，客未皆道見方瞳。

全海子こよめる

成嶋棟北

まろくものそりみのふるとけしつるはわま  
づる中のけふりなりり

次敬香七岳韻時風雪滿樓

三



御貫奚分越與兵。客中多友便相娛。詩才各有方之  
美酒德元未德不孤。誰倩滕郎責園囿。未知青帝御  
裏區呼益曰擬聚星會。隸筆何人追大蘇。

贈九右衛門

九右衛門吾愛汝。九右衛門汝憐老。年々歲々未相  
訪。同對春江漢樂圖。

一月末の日みそれ降ければ

毛利之徳

かきくもりみそれふるびらたましくしげはこぬ  
あたりはゆきもやあるらむ

二月四日春立ける日なるよひるすぐら  
ころもゆきのふりりひければ

いつころかほるはきぬらんこのゆらぐのよも  
やまもゆきはふりつ

はるはけふたちわつりしをふりつもるゆきの  
ころはふゆもやあるらむ

臨赴独逸偶賦此

井上葉軒

遅々惜別出都門。蓮藏摩天落日昏。自此所期一  
事西洋遊學欲究源。

今春三月十二日橐筆出洋歷遊泰西各國

嘉乎二十一日歸舟春申江上解裝楊柳臺

亭成二律

清客 袁翔甫

天涯有客倦遊歸。十萬里程瞬息機。到眼江山如夢  
醒。回頭溟渤尚鴻飛。敢誇閱歷恣揮麈。願屏塵勞暫



掩扉殊往雪未三限恨狂呼酒典征衣  
騰鼓敲殘過解裝重新酒壘典詞場依然楊柳臨官  
道猶自樓臺映夕陽塊磊合當消淨尽琴樽從此樂  
徜徉笑他五岳游仍礙不徧瀛寰未足狂

拙家

三

人

臘梅花下解征衣好似天邊鳥倦飛忙取青銅未照  
影認明故我是耶非  
貝女迎門喜不支爭求瀛海物珍奇可憐歸囊蓄  
甚祇有新編一卷詩  
不勞為我除塵襟自把香醪帶笑斟一車思量聊慰  
藉有誰海外足狂吟

倚翠偎紅樓雜詩

林

春

郊

深院曉寒人未起恁教黃月春如水東風有恨催落  
梅一笛誰樓夜倚倚 春樓花月

水天間詠銷魂地三日半醒還半醉一尺被池春不  
波朝未也宿雙翡翠 東憲記春

隔簾花影半林堆情緒至端和步未最是紅樓分手  
處有人三加月明恨 約期重未

雪片霏々撲玉橫黃鸝初近畏東風江南消息春未  
好一半梅花試小紅 江南春信

右次韻

閨澤霞庵

櫻雪深處絃聲起花氣滿簾香似水十二紅欄春月  
明了鬟枝得醉人倚 春樓花月

東風吹滿琉璃地美酒瓊沽今日醉六扇寫奴春色



濃桃紅映柳綠  
東恣記春

歌管聲繁酒肉堆紅情綠意勝曾未夢中不覺春宵

短翡翠蘭香相引恨  
約期重來

暖未暖雨濕簾櫳香斷香飄女女風只道江南春意

好玉人早已洗妝紅  
江南春信

詞  
與田抱生

花月樓臺歌管起鴛鴦雙浴曲池水忽看梅影落窓

紋可是玉人欄角倚  
春輝花月

綠未冰里繁華地勾引遊人未買醉一笑波山雪已

消春未尚畫双眉翠  
東恣記春

滿街櫻樹雪成堆珠月如霜照別未最是長教橋上

路垂楊春影暖風暖  
約期重來

高柳低花映綺橫教儂連日倚春風笑他遊客不相  
識卻向城南問小紅  
江南春信

曾曉贈河津君  
未廣 鉄睛

醉臥豐公詞邊樓酒醒燈殘冷綿裘開窓汀前暈々

白綾欄漫浸寒江流狂呼驚醒同人睡坐看半天柳

絮墜宿醒自有未飲且風雪如斯何辭醉華城美酒

魚亦鮮况有侑杯紅頭媪共君一別已半季客棹閒

話頃刻間明月孤篷播磨海遠望華城隔雲烟君交

情不似春雪易解我離思有如長江至海

播洋舟中  
三

出東京時天澄碧未到上國山漸白輪船夜奔兵庫  
津船燈映波冷汽笛暖未起從坡寫望群鷺都如疊



瓊壁巖々連亘雪海間山上積雪深幾尺京城空有  
精曾詩碧翁隣我意寂莫慣眼峯巒皆變容奇觀慰  
此遂歸客

吳信文怨軒共于熱海 中村敬宇

明治十七年二月二十六日我吳信文怨軒欲往熱海浴  
是日天開霽上車豁心目漸南氣候早梅花初綻落  
右駟小田原新樓塗丹腹供具皆清潔熱眼到晨旭  
次早行新道高下路屈曲于後達熱海就真誠社泊  
主言浴客衆房室皆充塞唯餘三層樓殿可供棲息  
得此實天幸居高望九廟東南開一面海天茫無極  
西北負山嶺蒼翠聳前若三屏日支煖頓令衣袂薄  
溫泉愛明淨三泉且三色浴之極快活冷熱意竹道

先導司飲膳屢未問所欲海物皆新鮮亦是饒口福  
久聞溫泉寺其名顯赫々授翁所創創青松手自植  
于今鬱蒼翠仰止起敬甫樹下豎一碑有文徵定作  
緣起記詳細此橋我曾讀惜石折為三云由地震厄  
寺僧如旧識細心為標北袈裟存古色金紫爛斑剝  
志良何日朽千載宛如昨其他室物多至不有未歷  
我已探驪珠于願固已足不在此一行日知吾所得

相撲御覽の記

成嶋峯雄

寛政三年六月十一日吹上りして相撲御覽の事  
ありかぬておぼしつゝなるものとも公ことの  
いとあま見侍るへきよし御ゆるしかふこりて  
朝のほとよるを見物のかたよあいらつとふ柳



久かたの雲井の庭よりして手毎にすまひのせぢ  
行はれしも保母より絶保えよふた、いぢこさ  
れしかその後は又絶て聞へすたけくいとめる  
ゆめ、ふのうへる便ありはるや錦倉右大將家  
の頃もつはら司位あるもなきも言まじやしき  
わいためなく力をたくらへ明暮れのとふれ  
草とせしむる室町家の時なとも御覽の事あり  
いとそまかあれど星うつりもの換りてことり  
使なとつふことも聞へす葵夕かほのかさしも  
絶しよる今様は四もとのけしらす土へうなとい  
へるものさついできたりといふしへの事とは  
變りたり其けしめほてとりつる由今は大関

と名をかへすけては関わきと、なつゝむすい  
と稱するをあらはせて三の役としまれぬ前か  
しら幕の内まくの下三段四段五段ほくちゝあ  
いちゝ前すまひとその岳をわかちたるさまに  
まわしとぞいすまひのまさはきやうしといひ  
弓やつる扇の开くさまを四本のはしらみゆいつ  
くる比あつる定となれりその名とも、見ま  
くちゝまきるしつけたるなるへしけふなく空  
くもりなく常盤の松う枝みだし遠くまけり  
たるまひと張りけりゝゝゝとうちわなしそのま  
へまよもとのけしらすをかまへその柱をは紅と  
紫とのきぬよしてつゝみもとをばくれなるの麩



してつみ添はしらのかみつかたはるは花田の  
まを田はくくみきめくらしたる土つきの  
ゆゑ青よまきてまを幣かすて神酒瓶子ニツ  
ほしかや日しりのみくふさそへかはせて  
三くさをしたき<sup>替</sup>つものな説くそなたみぬ  
のむしろ四いふ敷たり御三卿のかたへ一執柄  
の人々ぶらして萬の目布衣以上以下なるも法  
前ゆりたる限りは法杖敷給りまかたげな近  
さふらふかきりおさなきものまて引連いさ、  
う隙あると由見へす巳の時過頃もやあらん  
ふせ給ふめし令せの交名なと奉らしけし布て  
白張着たる男二人出左右の手桶の目とりみい

やまいふし居たり東の幄の屋ぶら追風と名の  
れる吉田善左衛門團扇とりさてこの行司木村庄  
えみ吉田幸吉外も二人をめしくして持のうち  
を通りて来れり皆烏帽子素襖を着たり追風土  
俵の内も入筵もつき幣も向ひ拍手打鳴らし祈  
念し方屋おつりをはらうてみまてをとり二人の  
行司みさつく庄えみ幸吉左右ぶらすし丹瓶子  
をとり神酒を四本の柱の根よれ、まつ、まそ  
くやかてむしろをば白張着たる男左右ぶらと  
りし四本の柱のもとよ同しつら子整さまよ一  
いふつ、引めく追風うつくやうぬて神かき令  
せ方屋開と云事をとらふいさ、か臆したるさ



まよふあふす聲をかしく菊中其詞みいはく天  
つちひふけけしめてゆる陰陽のかり清く明か  
かざる物は陽みして上るある是を勝とせつく  
おもく濁るものは陰みして下るある是を買と  
名つく勝負のたゞりは天地おのつかるさかる  
のことわりよしして是をさすものは人也清く  
さきよき所は柱をかまふ五穀成熟の祭のゆた  
なれば儀をもてせきそをかまふ其中より勝負  
を決する家やれはいまけしめて方座と名づく  
る也野見宿禰ら驚まていよしつ志實清林と  
いふる高名のすまひの流をつき幾つ親吉田豊  
後守家次内裡より追風と云名を給り世々相撲

の有職なるよし今細川家よつかふ此度御覽の  
式つとむべきよし御とくたりめらほくかたり  
なさまのなまし追風ことおほりてうしろみ別  
ふあうけたるむしろなつくこれは交名よきよ  
うぶの爪きるしむためとそ耳聾といひてこ  
のみちよとしひをしまきおきなむあさまの上  
下きて七八人つゝたかひぬたりいけるよ  
かいつくりたるもあぬわりとそ見えしさて東  
方より行司みちひきよまたかひわかくりさめ  
らすおひとゆせ一りく四本の柱の内み入ひし  
いしとうつくまう物し立あかり力足納々とふ  
みす魚てかつり入る西の方よりも同ししため



あしてかつり入るりぬれば東西の方よりも又かはりてい  
つ西も又然りみたひみあたう時は十人ついで  
つ是を土俵入といふいつれも錦繡のうたさき  
かきたり東の大関の野川たさきの上は横綱  
といふものかりたる是はあるかなかみゆす  
れたる者の許さる事とそ弟子相撲二人前後  
より引つれてわうらう先塔のえよて拜し土俵の  
内より入たるさまさきといかめちる見へつる  
者よりも遙かより立ちえ色黒くもちむつか  
しけよすさすしさをいたるかさすかみおそ  
か下は此道よしとは我いと思ひあかりたる様  
したる西の大関谷風といへる達か関秀の山と

いへる大みたくおしきものともを二人きたか  
い出て同じ事あるまうさま山もうあきりてた  
かくやうして騾のかこみまひはけよ中をもか  
くしつへき樹の株まひのさあしたりまきりほ  
ろろ引て鬚より入りもちよこやかまつくし  
みりやまひたるいさ、か驕慢のけなくめやす  
くて入ぬさて残る七十四人のすまひはやかして  
立あふつき用意より土俵入つあまうらすとな  
く暫し有て各乗場の行司二人水桶の邊りにあ  
り是か外より行司一人土俵の内よりあう四方の柱  
の本さきより引わり敷をきつるむしろの上こと  
よ一人ついであうすへて行司七人よりこまかくて



すまひけしちるぬれは左右より行司すしきよ  
りて東のかたや桂山とよい西のかたや吉野山  
と高らかみふ此すまひ二人塔の内を通りて  
水桶のもとより水たらしへて依る入各つあを  
りより合たれハ行司團扇を入聲をかくるこひ  
としく吉野山四手子組桂山か下の手みて廻し  
もつかみなくへきと引よするをうちのかたよ  
り足をかけ身をかたきの方へおしかけしかは  
桂山かみけのけみたふれふす吉野山か方へ團扇  
をかさし勝すまひ吉野山と高らかみふけふ渡  
しかけといつる手するよし東の方より尾上松  
西の方より錦野をめしあはす尾野松錦野を腹

よりいなきておし出さんとせしかかつりて  
已か足を土依みふみ出しければふみ越しの員  
とすつゝきて若松か服腰み西の興佐の海右の  
手をさしゆれんとするをわか松まこゝへした  
ぬは興佐の海身をいやくさあみ巻おとして勝  
ちぬ西の岩か崎と夜か崎と四手子組上へ下の  
手みて夜か崎の廻しをとる懸へつりあけ身を  
いやくさあみ懸投まなく龍か滝つあ取してか  
ふんとするを西の金錠かたき足を踏とめ  
させすたゝおしよ押出しぬ此手を押まりとい  
へり東の千歳河荒見崎を是も懸投まけ出し  
ぬ櫻野を西より安宅山四手子組廻しを取りり



あけて土俵の外へやくふたしる釣出す東の和  
田川と今出川立合めるか今出川ふみ越のそく  
まけしつ東の荒灘角を踏<sup>か</sup>ま<sup>ん</sup>とをかひつか  
升左の方へひやく倒す角を踏<sup>ま</sup>ふ人とするま  
ふを其体より押出たせしかはひなり出しの勝と  
定む行司木村庄九郎出かけり東の清川は前  
田川をつかふ清川押切て勝つ鳴見川を西の鳴  
澤四手は組上の手してかたまきの横廻しを取  
た足をあとの方へ崩さぬめふ投たふすたしの  
手といへり東の由良の戸立川を四手は組下の  
手よて敵の廻しを取隠へる寄うへの手よて二  
のうてをとり身をひやくまかふたうとたふす

つきて東の都山と朝日野つかひしか踏切買  
としかたまきより押懸りれみふとまうしか身の  
かためまねしきをすきまなく突れて土俵より  
足を踏いたす東の鷹野川上総野を四手は組し  
か双の手して廻しを取後へ持あげ土俵の外へ  
出しぬ是をは持出しとも四手持出しとむりつ  
り是より半の品さう芝の姿は西の筆の山と組  
しかうきそくとて舞うまうとひりれて体の  
力なく足うきたちまけぬ東の入間野尻男波と  
四手よみうへの手よてかたまきの廻しをまか  
と取下の手をぬき二のうてをかいかみ身をひ  
ふきまかふ足くけたるせう  
初瀬鶴と西の御



所嶋押切て勝つ東の嶋戸若の浦を四手子組わ  
かのうらか首をかくえ足をかけ廻しをして打  
たふす行司岩井嘉七立かすれり雪杖又西の淀  
渡をあはす淀渡寄合よりいち早く左右の手を  
持て雪杖か胸をつきければとく土俵の外につ  
き出せり東の時津風里雪と四手子くみ合里雪  
を勝子引付下の手よてかたきの二のうてをひ  
ゆるがゆら投なふす四手投といふ東の籠り川  
杜戸崎か表の手をよた、かよとりへ前へ引倒  
さんとすもよたふれされは其まゝ引かえし突  
いたせり此手をは引ねとしとりり東の咲野  
川濱風と四手子組ぬ濱風上の手よてまけしを

とりへいきよするせあつりて咲の山足をかけ  
身を押かけて打倒す甚さまいとゆゑし投わね  
しとりりる手ざり獲り東の荒沢か左右の手を  
ふと、らへ前へ引なふさんとせしかかつりて  
行還ひむかひへ手をつき負とざる是は我が住  
里近く生たちし相撲せれば本意なきこゝちあ  
竟か崎と西の香取山互ひよ二の腕を取あひ頭  
を肩よつけ押合たるか竟か巽の強くおしける  
方の身をはつし腕を取前へ引倒し香取山かい  
は廻しの勝と定むさ、波を西の荒波土俵のか  
きりをしつめいさ、かものはちるかせずして我  
か体をかためまもり居たればつめとも押つめ



ともいふ勝ぢり實りさ、なみは荒波もつあふ  
へき名りうかは行司守平秀五郎作れり常盤川  
と西のみとり川ひし〜と、りつめ土俵の外  
へおし出す東の千渡か濱たちかはる雪の浦を  
回しさおるをしいたせうか〜ゆ〜の手はらさ  
、か目とあるためらひもせし東の諏訪の次子  
袖の浦踏切負したり東の柳をしきうして荒馬  
も勝つ東の移の尾阿蘇の次と土俵のもと迄を  
しつめて勝ぬ東の関の川に荒澤の打切の負し  
つ東の玉の井荒熊もつかえり此ある能い色黒  
く大男の大力なるかおのか名もありてやかま  
へけくひたくろの廻しよ白銀しし熊つ川の輪

をつけたりのかめしくきう〜とみ入しか玉  
の井さし寄て四手子組投人とせしか猶足の残  
りけるを其ましく突出しぬ投のこり押切の勝と  
なれりさしもゆ〜しく出たちしかりかまほい  
なからんと覺か守伊之介行司す是がう上の  
品やう東の伊吹山暫々幾何れもおとらぬ大力  
さうか鶴かちけ手をさしおくるを其さしらる  
ニの腕をまきと捕へて身をひらうなめらばたと  
投ちふせうかいなひやうとらふ手やう東の鈴  
鹿山岩か関か四手よくむ〜とはなるくを  
下の手よて其腕を留てう〜の手よて廻しの由  
ひめを取こし〜釣つけ身をひらうやがら打た



ふす上手投とりつるよし東の伊勢の濱獅子か  
洞を押しめ養嶋は西のち野鶴よかひな廻しよ  
て投ぐる東の島火川四手よ組戸田川か下の手  
もて廻しとりなげんと引よする所と足とかけ  
向ひへ押かけ土俵の外へ押出すかけりたしと  
いつり東の友千鳥は関の戸か尻手さして押所  
を止の手して関の戸か尻手をや、又しく押合ひ  
ていつれ勝負つくとも見えさりしか友千鳥  
ひらくとみしか関の戸たまりすつき出さる行  
目庄之助うはれり東の加治か濱よ出羽の海押  
つめて勝ぬ留電は浮足よて西の錦木よ負たり  
鬻か濱いさよみせり高くふとくたくあしく色

里か西の宮城のりろまろくわかくさるはしき  
よめし合はせたるまたかひる力也おとらさり  
けんまけしおしあひしか終る鬻か濱土俵へ押  
つけられぬまへまはふんとて左右の足土俵の  
うへをわたりにければ土俵の足負とす始め押合  
し時一足土俵をわたりにはおのつわらゆるせ  
る定なれと是は左右の足ともるわたりにぬれは  
宮城野か方へ圍敷をあく中入とて一庭のもの  
菅燈の屋の内よ入れり止中下まを尾花飯やか  
れりなと給るや、あつてさきの如く行司等  
白丁などいしく坐よのまおけり行司等見見蔵  
立りつ東のみろく山よあるせりをあはす緑山



またの手もて荒瀬川をなぐさしかへりて下の  
島より上の島へ行くあくへきやうときちやハ  
汐鳴と西の越標押つめて勝つ東のまふ山伊せ  
う濱か二の城きと、ら一前の方へうつ伏る引  
たふす東の波分標川を押さる東の明ほの江刺  
川もかてるも前も全しあまうみすみかなる  
い貝所なきこ、ちす鷹の羽西のかぬかさまは  
四手技よせける獲きて名取川か左右の手を  
西の紅葉山とらへてちぬも強き年の方へひね  
りたふせし、讚岐りを西の三保か崎押さる東の  
湊川すまの島をぬたし東の窪か岡増見りを  
つむる行司木村庄太郎かちる東のか藤川荒鷲

か腹よ片手を差し前へ引方手をは荒鷲か首も  
かけ引おとすかたすわしといへる手やうとを  
飛鳥川かさし入たる手をみし八雲山へへの  
てみて外の方へ強くか、一足の内なるかけの  
かつたる手もて前へ技たう神樂岡を西の乱獅  
子上手もてせぐ任の江を西の外へ海へちかけ  
袖ヶ浦を西の高尾山押切る東の桐か崎藤田川  
と四手よく丹藤田川をひきよすかたまき表の足  
をうみぬすとやかておのか右の足をうみ外  
もあまらうかけて地ひくけかう技りたす更  
科西の越の海も足きれあてまけたり知左の海  
と西の林た川たしるてあつ東のわたか崎手前



か楽をかひまひゆるしてかこり式守秀土即立  
かけり行司す琴のうらを西の空の楽はね返し  
の手してかろ通し矢を西の三浦わたつきおと  
し東の宮の川鬼か嶽をつむる黄金山を西の海  
分四手よてびけ梅の尾を西のあふ汐ひき返し  
東のうひか楽富田川を持出し東の葛か崎不破  
う楽を押まゝめつ行司岩井嘉七めし合す度渡  
を西の家か鼻はね出し東の岩か洞之浪を押し  
きる温海嶽を西の神担山をぬ東の松葛まつか  
いて秀の山うみこしの負とざる是るの事とも  
今方しく返し委しくかくまほしけれとあまう  
くた〜しからんめれはもがしつ東波の音滝

の音いつれ高けんと思ふは浪の音押さう  
みてまけぬ式守伊之介わけつてせしあはす東  
の波渡態か嶽をかひな廻しみてせけいたし東  
の岩か根巖島をわたしかけよてなく是より上  
の岳なる縮川を西の鳴滝四手よとみ押まり鬼  
勝か胸へ西のあし渡り肩を押あて腰を入かた  
きの腰を引よせなく名作山を西の越の戸をぬ  
出し東のりたか原増見山を押さる磐井川より西  
の逢か楽立あふいつれも増長弓内のけきやう  
せるこころをそまじきかたやう逢か楽いたる  
風か弟もこころよりかくたうまじきみぢ人  
みて汗を握りあちらめゆせす誰ゆほり〜



とりいては回しきこちするもものくるをし  
きや四手もくみしか盤井川りこしひきぬせ身  
をひわりせぬとせしめて押し倒す四手ひね  
りこいつりやいと愛こくつあつりたるを御登  
近ければやう馬しと制す是なる三後と稱せり  
行司木村庄之竹結九紋籠西の柏戸をあはす  
九紋籠またゆらゆらのさまなぬらすくれこた高  
くたしこころぬらまやうやうやう柏戸は姿形ちと  
このひありきやうあうこちころまきとみゆつ  
おとりさしよるて四手よくか上儀まわつせし  
つめちろ庄之竹戸か方一團扇をさけおひ  
まひの職またつたりと愛し扇をさづくかのを

せたるゆらゆらの鼻しろめるうしろてほりせけ  
やう楽服ひあしの障幕は雷電とことこのころ鳴  
かみぶらも響き渡れるをあはす立合さま又陣  
幕早く雷電か咽一手をかけのといつめとらふ  
手よて一度は土俵へ押つめたり此程の内とり  
みい舞らもすまひも立あひぬるも滞りなく勝  
ぬるを思の外もあるかばと入りふ今日も楽  
服よかやうつりとして弦を障幕は興ふ三けしため  
らひて追風善左衛門兼つ親の内裡より賜りし  
四幅の袴とりする物を着獅子王とりふ團扇の  
休々も傳へるも持てわり出たるおもちあつ  
故ありとみゆ土俵の中夫はありすこし後ろは



どろしたつ左右より山野川谷風中たかよあや  
み出御物見の方を拜し土俵より左より立は  
かふりふの左見の是を昔と上中下さ、めきた  
つ左よかたうとし右よ心ひくもあり六十余州  
もゆるされなる手合ければ是よりこつたる物見  
あるしともおほつすやすみちたるは行司  
さし構つたる團扇の下より山野川谷風を取か  
る處風左右を取をまうちころちわらまぢひか  
すこつゆかけさるまうあてりたることあり  
せしとてまきりあさつまきりあぢ、ひはあはす  
まけしためらひて團扇ひく声と昔より西の谷風  
ふとよろてけぬたれば山野川取あふる及すす

二足三足たちろく追風谷風よりちはをあけに  
ふの勢よかぢつりところをまつく谷風さきの  
つよみ山野川のちのよめみと勝負決せるやう  
とこあけれ谷風かおさめのちりさしたる人又  
は山をもぬくべきをかくていこと中あぬこ、  
ちしたれと野見の宿禰か蹴速をうしほひ富山  
庄司次郎か長居を絶入せしやうなるよりゆこ  
とからうるはしくさてあるべきもやあらん谷  
風を清くやまひさ、け四方より廻しまこ  
してうちかたけ拜して入ぬ此を賜ふることな  
幾田内府の迹江國常樂寺よりて言地とりくる  
獨力を聞きて角力見給ひし時勝たるを賞して



絵るぞう今るかくやんとりり

かちかたよりふたまはれるあづさゆみ

もとのやしやうためしをやく

すまひともろくの白金ふさる賜はれうとそ

きみかよふあふひのはまゆふかほも

めくみのつ中のひあうそふし

佐野肥前守義行ぬしのめめる

めしあはせかちしすまひのころをゆ

おもひとらつみるはらさまし

父の和泉もめつりかなるもりみるあさいたる

あしりつて我も年二十たよめかくはなとさる

かろこといふて詩つくれり

翠幔新帟相撲場横綱意氣最柔揚雙々分得英

名遠兩々帯將奇帯杏錦鋪禪迦子里秀弓弦賞

見一時光抜山餘勇拵休買別有神川替古裝

まゐると夏草の花なく男鹿の角のつか短き筆

み書つくすつこもあふねとむさしの、廣き走

めくみふかゝるめさを見たてまつること、か

しこさのあまうとむさむ

四時吟

炎 春壽

春蘭何窈窕夏竹政便娟秋并親巖客冬花愛水仙

又

春雨杏花開夏風蓮葉凋秋霜催晚菊冬月映疎梅

呈春山伊達老公

末廣 鉄腸



古今所尚福祿壽，備此三者誠希有。請看高位顯榮人，其壽豈得百年久。又看安居飽食徒，往往終身有青卷。世上豈無耄耋客，徒多辱而悲白首。抑公汝齡繼先封，儼為十萬石太守。仁澤在世不可誣，士民仰之如父母。令子令孫貴而賢，一門振々亦餘口。老後南海營英表，白雀訓庭松當牖。况又靈筆冠古今，捷適直欲凌顏研。九重乙夜賜御覽，素絹七尺黃龍走。天顏有喜恩靈深，特命下賜三品綬。皇家新行養老典，知公又受登賜厚。壽齒一百頰，如童豈止福祿世。至偶天為聖，代示詳靈降。此異人為耆者，公是人間中神仙。不壽不萌如响嚮。

羊佐治上

友

春壽

春風凋盡日時顏，款款車過破馭間。二十九年重拭目，半空靈出鏡名山。

頤田橋題

全

喚醒藤太問前蹤，湖底靈宮問玉童。今日三人密神前，雪中踏臥老鵝松。

墨上看花

成嶋 標北

懷亦騷流成一家，輪蹄豈復趁紛華。翻未例歲尋常裏，蓬底臥看兩裏花。

全

末廣 鉄勝

鷺衣濕尽蝶食愁，忽見江天夕照浮。趁早何人題壁上，真成晴好雨奇樓。

全

山田 風外



いたひとのこころをいつくみるはたまたま  
たせしとふれるあめかた

翌日ハ滋見過市村水香亦至對酌成詠

春 清翁

官興殊佳野興佳水興不亦休互誘平安城裡花堪  
愛何独平安城外花

小金井小遊 末廣 鉄膳

昨夜燈前煮新泉怪底香氣鼎中傳此水發源ハ金  
井料知春色漲玉川頼有里人為東道鉄輪更々鞭  
芳草行飲無人不獲瓢正是西郊風日好長堤十里  
花萼空其間浸浸流水通狂風捲地紛飛雪碧流變  
為一道紅君不見東京城宇十万户甘泉日汲美於

乳源頭植櫻定神仙異香落水除毒與勿怪都人風  
骨清且旨飲未香透肚花下傳杯多逸情只恨林外  
夕陽傾我上車時花亦舞共趁流水入京城

癸未嘉平月初六日與吟香先生偕遊武丘寒  
山劉園諸勝薄暮歸寓詩以記之余素不善此  
唯知我者能諒之 郭 宗儀

薄暮輕舟越月潭雪覆古塔是寒山園下掃榻迎東  
客日落糲糊未飽看

次韵 岸田 吟香

姑蘇城外買舟還渙笛声寒月在山欲問當年夜泊  
处殊碑剝盡莫人看

伏水觀梅會于大龜谷佛國寺與友峰ハ滋水



香同賦分得春字

春

壽

前葺後杜旧相隣一路惹他羅綺塵南去平安天尺  
五梅花桓武帝陵春

近衛翠山公藤堂詢蕪公以九老開九老會筵

於上野湖心亭時明治十七年甲申五月十日

賦四韵長句以紀事

田本 黄石

海宇澄清絕殺氣太平時節可歡欣山林泉自有勝  
事臺閣豈其五好文宋代者美多鶴沼重朝尚盡  
麟群如今九老成斯會三在青雲六白雲

尚齒會賀言

大沼 秋山

尚齒筵開仙島中水亭夏景瑞鸞香靛葛葉董暗  
砌雀落松花飾晚橋壽筵列庭前古域白衣混入紫

未叢七旬唯知欠三歲笑比盧公還秋公

公會席上次黃石翁韵

巖谷 一六

壽星奕列藹祥氣禽鳥知鳴草木欣仰見南山鍾氣  
秀術知東海耀人文千秋好事堪傳盛一代風流人  
拔群永保功名兼富貴休言過眼似浮雲

祝九老諸君

勝

海每

逢茲尚齒會亦列群仙一觴又一詠可以祝延年

贈小蘋女史遊東北

川田

蕪江

聖秀之能文墨者大抵言語動止類丈夫實面目可  
憎猶小蘋女史則不然女史善畫山水兼工花草而  
詩之與書亦頗有可觀者焉今茲甲申夏將携彤管  
東游請余致書於沿路文士為之尺卷字不肯執筆



曰子城地不狹藝僕物人皆見其可愛不見可惜何  
用失容為要然子試告人以此言則其不失容之功  
愈於失容亦未可知也女史拜謝乃書以贈

白熊引

總生 寬

鼓声坎々天已明登壇十日只卜晴平地已立鐘  
处且有觀者滿高棚曰山曰川曰草木又得禽獸為  
綽名東西排行有頃以各因好惡費細評一虎踞處  
振双膝一竟騰時傾一觥且憤且喜彼與我搏天震  
地喚呼聲齊楚晉秦相伯仲偶有奇異真堪驚柔能  
服剛如割大已入死地後得生手執雕弓腰張網柙  
谷為号是主盟天下濟多猛士五復一人與相爭  
時出勁敵大捷者何料一敗傷足榮嗟乎一場博擊

之戲已如此焉名誰能長持盈

小山春山評梅谷角能之雄其力可扛鼎非虛名  
者然因一場之敗損其威名今以虛名博名於父  
壇揚父自銜者真梅谷之罪人矣道人此作蓋有  
所諷也歟

赤石八景詩 追次林羅山先生韻 次 春清

前山翠巖入烟霏馬樹依微沒夕暉  
路鈴鳴窅谷雨馬蹄泥汚去人衣 大愈暮雨

一篇遺詠憶歌仙淡路洲前欲曙天  
初日畫微山隱見相思寄在霧中船  
仙蹤朝霧孤吟撫景興如何岸上  
知人曳杖過帆影一行白如鷺  
畫屏風裡度煙羅 蘇江國作



莫遣惡公夜半知，由來此景在滄溟。夕陽影盡野中水，恐併太行王屋移。清水夕陽

伊尼豈做不平鳴，何處隱然鏗艾鯨。但道潮音如梵

唄，右鐘猶退古時聲。尾上鯨音 起夕海城龜日弄余明之行

伊尼豈做不平鳴，愛聽靈原月下聲。猶是吹之供宴

樂，應緣多食野之華。印南喪鳴

拳密引領互相望，雪粉能為巧樣妝。若似扁舟勝不

動，猶疑覆水在坳堂。藉島晴雪

杯在手中人生每，有然坐你鏡中遊。一輪還我天邊

月，灰似明珠合浦秋。明玉明月

送闕桂枝女歸清國 去廣 致賜

自直江津赴東京瀨舟中 鱸 松塘

菴浪雙輪潮路通，不須帆力假東風。玻璃面々船窓

敬取見青山入趣中 修身要訣序 南摩 綱紀

或尚修身之道，余曰：聖賢經傳已悉焉，何須余喋々

曰然。然其書汗中充棟，不能至楊岐之迷，子示其要

曰：余固迷岐者，安識其要。雖然，試妄談之，子亦許妄

聽之曰：修身之要一敬已心。敬則正言，敬則誠身，敬

修倫常之道，經倫之業，皆由經而行。大學之慎獨中

庸之中，知書之欽哉。詩之思至邪，皆敬已。我神道之

立教，亦以誠敬為主。若文釋氏之殺邪，漢之道，虽其



友人石村桐陰常用力於修身竊嘆輒近風俗頹敗  
人情偷薄奈未流忘本源尊智術忽修身嘗著修身  
要訣今又改訂增補請序於余々大嘉其益世普尊  
所卷車尚以作序

支那國孔子まつりの沿革 吉田賢輔

今西洋人の言を聞くと人民皆一神主義を守  
るより、即ち神教する事を知らざるものは  
皆しとりつり然れば儒教主義を習ふるものは  
儒教の根本元祖なる孔子は後りたる事を詳知  
するや必せし然れども近年輩はまゝ知らざ  
る人もあふんかと思はるれば左子孔子まつり  
の沿革を述ぶつしすはちそのまつりの始は

周の敬王四十二年魯の哀公孔子を許して尼父  
といひその旧宅に廟を立てせ々歳時を以て孔  
子の家を祀らしむその後漢の代とて高祖  
魯を過ぎ太字を以て孔子を祀りこれ帝者孔  
子を祀るの始なり平帝は孔子を追諡して褒成  
宣化公とつりこれ追諡の始なり東漢といは  
り明帝は辟雍及び郡縣の學を命して皆孔子を  
祀らしむこれ國學と郡縣の學を以て孔子を祀る  
の始なり北魏の孝文帝は孔子を諡して文聖尼  
父とつり北齊のときは毎歳春秋二仲子釋奠  
才これ春秋釋奠の始なり北周の宣帝は孔子を  
鄴國公と追封し隋の文帝は孔子を先師尼父と



と謚し國子寺に設して毎歲四仲月上下先聖周  
公先師孔子を釋奠し州郡の學に於て春秋仲月  
を以て釋奠せしむ唐の高祖は有司に詔して孔  
子の廟一所を立て四時祭をいたさしむこれよ  
り前は周孔廟を同じうせり太宗は周公の祭を  
とひめ孔子を併して先聖とし州縣の學に設し  
て皆孔子の廟を併しむこれ州縣の學に於て  
廟を立てるの始なりこのとき孔子を宣父と号せ  
り高宗は孔子に太師を贈り玄宗は孔子を隆道  
公に封じ肅宗は孔子を文宣王と謚し宋にいた  
りて真宗は孔子を元聖文宣王と謚しまた改め  
て至聖文宣王と謚し元に至りて武宗は孔子を

大成至聖文宣王と加号し明にいたりて太祖は  
朔望を行香するの礼を定め世宗は至聖先師孔  
子と号し清にいたりて太宗は定めて春秋二仲  
上丁に釋奠の禮を行ひ世祖は定めて月朔に釋  
奠し月望に香儀を行ひ大帥至聖文宣先師と加  
稱し又改めて至聖孔子先師と号し聖祖は魯に  
幸し親に釋奠して三跪九叩の礼を行ひ方世師  
表の四字を畫して大成殿に懸けこの畫書を  
天下に頒ち世宗は郡縣に設して丁祭に太宰を  
用ぬしめ生民未だ有の畫書を國學闕里及び天下  
の文廟に頒ち高宗は其天下参の畫書を國學闕  
里及び天下の文廟に頒ち仁宗は聖集大成の畫



書を國學闡明及天下の又廟を頌てりこれ支那  
に於て孔子を祀り孔子を尊ひたるありさまの  
概概かゝる又古来支那の天子は彼の孔子を尊ぶ  
ゆゑこれにほこゝを思ひて記せしむるなり

甲申六月警給大禮先生七回忌辰令詞如電  
復軒二君設祭於不忍池佛寺恭賦以呈

依田 百川

白髮蒼顏宛在茲先生風采世皆知  
轅門當日草飛檄獄告三旬刑日詩軒  
轍于今守遺業韓歐自古仰宗師  
菲才寧耐贊通德媿捧瓊蘂為說詞

南摩 綱紀

逝川不返前離弦宿草埋墳已七年  
經學文章誰繼

後風流書畫古玉前終生摸範新君美  
二子淵源獲老泉蹤薦蘋蘩莫未嚶  
半秋細雨杜鵑天自注云先生常悲白

大沼 枕山

醉吟湖院坐涼筵往事追思忽七年  
迴髻髻未應怪底觀蓮時節不見蓮

勝 安房

さみたれをやみなまきころあゝつさるしの  
七くといのきま  
さみたれのつ中うちはあまなれもまたむかし  
をまたふあいのうひいす

勝部五松君五十日忌辰成鳴安田杉山諸君  
有薦蓮之琴賦以代行香華以誌感



閑根 癡堂

同吟同醉幾花時、猶記新題賦。土宜奉檄當年為親、  
喜鼓琴今日、使人悲黃泉。擬有承難地、墨水終年再、  
會期一語空公々、瞑目故交皆足控孤思。

和南摩羽峰翁環碧樓雜詠 某

林樾繞屋望、中有一泉流。林靜聽鳥語、萍動知魚遊。  
篆煙一縷出、蕭去山色高。欄雨後樓。

立杖のまゐるし、ちほろしくして昨日らふい  
つと涼しく、貴ゆるなど人とももの加こるほ  
ど或る人の俳諧の発句、舩頭もけさゝだ  
入れつ杖の風と、いふかあるはめづりしく  
思ひよれる句やう、歌ふてゆめくることは

いけふ、いまのいまたきあ、ぬやうやうと  
いひければ、  
前田建次郎

ぬれぬとも、さうですきこしうらのあまのそび  
いや、かよあさかせがふく

上田客中送人 蘊 松塘

遊庭湖樓、歲再周、今遊本擬、神前遊亭、知我却送君。  
去轉白客中添別愁。

慢向客言、次某詩韵 芳川 正

孤松夢驚燈影微、推窓殊月冷侵衣。數声堪恨南飛雁、  
殿北秋深客未歸。

奎海日、英人情已厭南中、苦鴻雁何從北地來、同  
一工趣、照應整鬢、無致白圭。



○

佐久間象山

敏一字是為學之法而為治之要亦莫若焉天下可  
學可為之務如此其廣如彼其故學與治皆不可以  
不敏彼終身于官而因彼無功者半其勤力不敏十  
常八九可不警乎

起上り小法師の俚曲 北 洲

小法師よ〜 お前は禪者の徳とはいやな白  
眼くす人びなまこはい類折るは人の障碍子寂  
然不動も七轉八回又起上りわ〜 笑ひ唐の  
大知の陽てかあるか忍ぶ心む浮世なる物り其  
えろしも深き漆草の留門は鳴神といひゆすま  
いかすまなりは隅田のびかれと人のろ足み

も菊も世の中はわろ〜 せ々の糸細工神も  
佛も誠も虚もやし〜 こそまことなれあふ  
うつゝなうゝめの世也

閒情衣〜 詞をよめる 齋庭歌

前田 夏繁

うちみるよをかしたもやちくさのはなの  
りろ〜 てるつきのよこのみちびくちま〜  
よかきしきものほほむはらのつゆのやあぢせ  
あさぢあのおしのこ〜 とはちりはたれも  
あも〜 とさをしかの〜 まことこ〜 ちづのめ  
のきぬたのおとそ〜 けほかみかやしあうら  
さをしかは〜 のた〜 てもあうけるをひこよ



もかれすころもうつらう

さをしかのめこまはあれともあまのみの

うさはきぬたようちとちあつて

七月既望

鳴 標北

やちくさのいろもさやちみゆるかなゆるの  
ふしきかろりのつきあぢ

全標北うしし贈る長歌 松浦 某

ゆびとりて かまかそられは こよひしも

あまのはじめの ゆちのみの まちのおはな

りきみしらま すくやちならば まつあぢ

の きこゆるりそよ ちらやみの あいぬら

はまな うさくくと さそひらちして あま

こふね かりてうかつて またまなす こよ

ひのつきよ いかれても うたはしものを

きみはしゆ やまあなちす ひとあしも

とるすひまさす ひとめちよ かげもみまさ

す おどさして とくりねあせし きみあみ

る かくるやまの あたみみの かくるさ

りさは かくるましやは

反歌

うみけらのあみよすめまじきあぢを

ひとりみろよのをしくもあまのあな

香水製造法

香水ノ製法ニ浸漬製方ノ非浸製方トノ二種アリ



リ即ケ左ニ之ヲ分浸スヘシ

浸漬製方 浸漬製方トハ取油三百三十四英付ト  
中肉凝脂シヤク一百六十六英付トラヒウガケーロト  
糸スル盤ニ入レテ溶解シ之ニ注意シテ搗搦シ  
ル番薇ノ葉一百五十英付ヲ加合シ一時毎ニ之  
ヲ攪動混和スヘシ斯クシテ又之ヲ二十四時間  
ホト静置シタル後ケ再セ之ヲ溶解シ且ツ屢々  
攪動シテ其ノ盤底ニ着ク一ヲ防クヘシ然ル位  
ケ之ヲ篩布ノ上ニ移シ正角ノ瓦形差シクハ之  
ヲ葉形ニ摸シ之ヲ壓器機ノ下ニ置キテ壓搾シ  
軟知ナル液ト硬固物トヲ分離スヘシ又壓器機  
ノ下ニハ鉄輪ヲ指メ且ツ板ニ穴ヲ穿ケタル桶

ヲ置キ此ノ中へ前ニ述ハタル瓦形差シクハ葉  
形ノ混合塊ヲ置キ壓搾スルヲ以テ香水分ハ板  
ノ穴ヨリ流出シテ壓器機ノ下ニ溜ヘ置キタル  
銅器ニ流入スルキヤリ而シテ取脂ト凝脂トハ  
壓搾ノ都度交換スルヲ要セス初回ニ詰込ミタ  
ルモノヲ凡ソ十四乃至十二回程連用スヘシ即  
チ初回ノ分量ハ又少ク取換セラルヲ為サス唯カ番  
薇ノ葉ノミヲ取換テ凡ソ其三々英付ヲ一回ニ  
一百五十英付ヲ用フルヲ前述ノ如シ使用シ尽  
ス迄ハ其儘ニ連用シ以テ良好ノ香水ヲ製スル  
ヲ得ベシ

橙類ノ花及ビ肉桂類ヲ以テ香水ヲ製スルモ又



前ノ如ク蕃薇ヲ用キテ製スルハ異ナルナシ  
但前法ニ於テ蕃薇ヲ使用シタル代リニ此等ノ  
種類ヲ用フルノ差異アルノミ何レモ皆ナ此法  
ニ依テ製シ得ベキナリ

(非浸漬製方) 非浸漬製方トハ木四片ヲ着合メ深  
サニ三英サノ方形木匣ヲ造リ其底ノ端ニ皮キ  
込ノ内縁ニ於テ硝子板ヲ架シ所謂カリアムナ  
ルモノヲ造リ板面ニ豚脂ト凝脂トヲ混合溶解  
シタル油液ヲ落シハルレツトナイノ西洋カ  
ニテ延布シ其底ニニミケ月ノ箇ハ毎日新鮮ナ  
ル香水ヲ板面ノ諸所ハ懸置シ右油液ニ適宜ノ  
香氣ヲ附ス而シテ此カハ齒々積リテ

更妙多キニ至ラシタルモノニテクラツセノ某  
製造所ニ於テハ三十乃至四十ノ「カリアム」アリ  
ト云フリ盛ナリト云フツシニ々トウールル  
誤ニ見ヘタリ

又ワグズルルルノ誤ニ拠ルニ良好ノ香水ヲ製ス  
ルニハ大抵六十度ノ温度ニ於テ油類又ハ脂  
類ニ於テ浸漬スルニ在リ然レハモ又或ハ純粋  
ナル豚脂若シクハ純良ナル「カリアム」油中ニ浸  
シタル綿布ヲ層子其間ニ香水ヲ層積シテ温熱  
ヲ併フルヲテクシテ之ヲ製造スルコトアリ但シ  
通常ノ香水ヲ製スルニハ唯豚脂又ハ髓脂ニ姜  
黄ノ如キモノ、根ヲ以テ着色セシ揮発油類數



高ヲ丘ニテ添香スルノ也ニ別ニ手數ヲ煩ハガ  
イルキ可ナリ

藻塩草誌卷之二了

藻塩草誌卷之三

甲甲元旦試筆

小野 湖山

門卷蕭然旧草堂  
喜聞鳥雀報新陽  
今年試筆常年  
異賜視春浮古墨香

新年漫詠呈長梅外田本黃石二老

壽開八秩歲更端  
百事拋去且自歡  
今日寒瀟空靜  
謚以門鷄犬也  
怡安好追節序催春酌  
更與松筠伴  
歲寒張文飯天多健在  
哀年尚作女年看

癸未除夕

橋本 蓉壺



隔壁歌呼徹夕講，何人守歲阿戎家。篆盤香度燭未  
火，磁斗梅窗臘燼花。詩來牛膝已堪托，負饒擗尾且  
休嗟。功名不是書生事，一任漁舟送鬢華。

○鴻川集

楠峽市今川哲公墓

駿逸之山何莫蕪，嶽嶽與雲相辨次。蘇鄂終開楠峽  
間，設是哲公軀沒地。馭門折南宿，崑崙青嶺吹影鴉。  
易睡斷碑，地知似有言。一向壬辰伸大義，憶公大節  
矣。駿城西略堂，之桓又志。鞭楫一指，降旗張宴牙。  
門誘重智，人謂得軍。擊趾馬，誰料張兵出不意。大雨  
漫山，亂軍聲電走。八天衣墜，爭兵爭馬人先傷。四  
力爭人，真心醉爽。世英名，職一戰百年。叩葉長涕淚。

縱使公卷乾坤未，豚犬何足昭大事。冰之熱血塗山  
原，古戰場荒秋草翠。君不見機山，女不識履，兵機終  
制。獨頭刺，盡聞公風面。生汗得非盤根，試利器。又文  
要貴為大名，常怪成敗。未人議，雄才徒稱。走法師一  
矩，傷心本能寺。

地震行

洪水成洶，唐大旱禍成湯。聖世猶如此，天命固三常。  
茲歲十月，旁死魄陰氣晦。昧夜將興，何物痴轉啼。嗟  
々，忍見奇禍起蕭牆。屋瓦亂飛，屋梁碎已須。天地付  
簸揚，責官既走不尚馬。直棄君逃命，可傷一條黑烟。  
焦天起，餘殃又見。赴畢方傾，盧旌斷添薪木。八百八  
街落火場，平生豪者故事。劫寒肌掩淚，立路倚人處。



如山三葬地，以中有骨節，即壞官矣。倉廩賑恤，多虛  
言，保賜救，連亡十方生，豈獨一寒闔？君何狹，羅奇快  
君不見，二百餘，朝野塵，熄，羅曼之，民生，幸歸，一撤，十  
金等，泥以，不省，眼前，家產，陪，天譴，可，不畏，而慎，何有  
於風雷，更色，今日，不逢，大笑，昔，前日，歡，樂，有，誰，識

不知林歌丁巳九月，同中島，生，遊，或，田，廷，徑，八，  
傳，作，不，知，故，歌

楨，疎，脩，竹，半，枯，死，也，木，參，差，洩，日，曛，陰，風，浙，漉，作，人  
言，一，叢，惡，霧，吹，地，起，入，若，不，足，總，者，迷，村，家，往，々，失  
童子，效，即，怪，即，將，靈，耶，瘞，祠，尚，在，蒙，茸，裡，憶，昔，黃，門  
公，巡，撫，時，單，身，下，馬，手，雄，麾，公，之，英，明，誰，敢，敵，白，衣  
老，翁，出，迎，之，甬，未，收，雲，也，不，聞，于，今，塤，牆，驚，四，圍，土

人送我言未歇，吾亦感歎，竊有說，汗不聞，宣王之圖  
四十里，陷，附，其，於，懸，懸，窟，方，今，四，海，足，鋤，耕，菊，誰，何  
處，不，復，行，滿，目，黃，雲，秋，美，海，數，弓，之，地，有，誰，爭

醉鐘馗戲鬼番二首

久矣終南前進士，一究身死神未死，雄姿入房，亦徒  
然，不如生前一杯長歡喜，我性西愚人不齒，百年好  
友唯冤鬼，醉後耳熱，呼鳴々，此心共汝，俱至耻，嗚呼  
先生之風存前軌，一幅傳神此番是

蕩，散，盡，石，角，歌，于，思，睥，目，醉，容，奇，猙，獍，中，空，神，秀，氣  
母，乃，終，南，之，鍾，馗，大，鬼，鳴，鶴，小，鬼，舞，肉，盤，對，崎，金，屈  
厄，狹，怪，禹，手，何，竹，據，英，靈，寧，有，袞，鷹，窺，當，時，汝，物，入  
空，掖，滿，朝，簪，而，半，鸚，鵡，大，鬼，祿，山，小，國，志，腥，風，海，徹



帝肝脾，禹師服，力為一等，看破美惡，醉不知一痛，而  
心感竹聚，豈愛糴，戲供見，燒同時，八仙皆飲，佳醉，歌  
猶見淚，泣衣如，何一飲長，落炊，磨手，半世伎倆，了無  
後，呼哉，半世伎倆，了無施，君不見，鄭家子，李家兒

養老山稚松歌應中馬長八需

濃五佳山水，獨我養老峰，藍水決之環，如帶，奈海雲  
濤勢，驚久，巨靈擊，斷山，手，我一條，大瀑，踏銀，竟，老兒  
遺跡，家在目，土人，今尚，護行，空，鳥生，獲松，於彼，邑，乃  
里，獲歸，意，十叢，生也，維孝，勤不，怠，養老之名，相契，合  
其長，數寸，老翠，頽，勢，氣，家然，較，竟，驚，想，見，翠，刺，夫，三  
十六，峰，及，峭，立，我，有，孤，松，在，荒，園，堪，夫，一，斂，狂，狂，塵  
面，向，東，西，人，未，返，枝，葉，輪，菌，十，六，春，東，海，之，隅，今，見

汝，彷彿，天涯，過，故人，共，採，散，木，吾，已，笑，不，似，竟，分，勢  
振，且，君，不，見，老，杜，培，栽，霜，根，細，猶，期，老，蓋，盡，十，歲，又  
不，見，坡，翁，愛，養，青，玉，鍊，自，云，壽，子，百，年，心，秀，尋，多，年  
凌，霄，翼，鸞，清，如，瀑，聞，如，龍，鳴，呼，孝，德，通，天，彼，何，人，歸  
類，君，家，長，養，老

花清歌

芥子，納，須，彌，壺，中，開，泉，國，何，人，故，技，倆，將，母，同，梅，菊  
桃，杏，紛，如，織，萬，種，春，老，卷，可，懷，分，之，人，留，衣，仙，食，君  
不，見，豪，奪，董，天，一，劫，花，不，如，鞠，晦，甘，緘，默，木，適，山，上  
冷，秋，霜，一，捲，之，衣，長，七，色

江晚

半灣，過，雨，磨，落，日，夢，花，帶，露，紅，如，滿，愁，人，畏，晚，早，歸



城漢箭留我看秋色，逝者如斯三晝夜，泉泉混之流  
不息，洙泗淵源豈也哉，迷津自分長勞力，漢箭掉首  
嗟不言，孤壘醉醉江村夕，清流濯足水何知，江山風  
月真安宅，文章濟世鎮，細々不似丹楓，山江長托跡，  
你歌傲然尚白鷗，煙波激立天地墨。

庚午歲晚書懷

人皆掩怨顏，梅猶有偷色，寒香撲玉惠，似訴春消息，  
吟酒向南軒，醉渡宛定吳，四十年夢過，百念鍾胸臆，  
女杜走江湖，落魄初歸國，卜居非一所，古耕什衣食，  
矯足只啼鴉，山妻艱紡織，桂玉累家鄉，百物帶不得，  
瞻彼豪富兒，千金誇粉飾，皇天又增哉，使吾至此極，  
寧可半塗休，勉旃不羨塞，送年又迎年，一夕夢髮白。

讀義人錄

元錄十四歲辛巳，天使還臨東海水，公門羅待是何  
人，淺野公吉良女，君召使擯，危勃如彼哉，弄我似鄒  
俚，積怨塞胸，諶刺々，荆軻投匕，空切齒，一斤大石重  
千斤，斯之四十，舍人不輕死，均服振々，排雪未快戰，  
何知寒墜指，堅冰在手凍，月高血風，所遷捲銀海，已  
獲君仇，祭君墓，生為忠臣死為義，忠室子聞之，感不休，  
濡將大筆，詩終始，一編文字，挾風霜，若向士林提人  
耳，豈壘馬遷論，李陵頰，似夷高得丈子，英風奮兮二  
百年，何物懦夫不興起，我取此書讀，百回自覺義氣  
必骨髓，君辱臣死自古然，今世豈無志義士，嗚呼兮  
世豈無志義士，君不見櫻田之雪，血痕紫。



到神戶港漢車中有感

聯車十餘輛，飛走如毛，借此个馬力，代彼萬人勞。  
洋兒何精巧，妝番折秋毫，其技傳東海，摹造眼漸高。  
短笛時一響，鳥雲遙演槽，車行人未覺，跌輪走雷騷。  
忽穿水之府，僅過山之坳，崖懸如鐵壁，林木似蓬茅。  
神港已成矣，雪際認高旛，煙威倏變慢，奔勢致餘豪。  
東海夢空智，聖世育英髦，誰敲摹造手，出盡歷彼曹。  
蹇我志遠志，白首臥蓬蒿，及旬巾車去，烈酒醉也郊。

神戶小悠

京坂多佛地，巡詣助吟吟，欲探西方路，一泛日詩賢。  
火輪車輾々，飛來一刹那，香風吹我去，小酌就優閒。  
水樓衣一血，般若湯飲醉，其價貴於玉，綠林撲白波。

外面真菩薩，內心即夜叉，我亦生法界，未輕損佛陀。

誰料三途岸，造此奪衣婆，孽魂惡牙草，惡緣得一過。

懺悔猶應及，自矣信尋根，去矣春如海，淺耳聽鶯歌。

從厚美山拾秋葉，山東出於嶽，川駛其間山路。

羊腸溪水盤紆路，強徒笑恒然賦。

四十四盤山若削，四十八溪水未落，山則攀水則涉。

攀涉日復勞，人脚天陰如斯，徒吾往前途个峰，又力

整。

大井川

悲水浴夕幾，尺重以崖買，涉上肩峰十年不墜，青雲  
志一道奈流駕，六竟。

薄地眺望



嶺樹重之過雨南興蕭半捲下崖蔓寒潮落日秋天  
遠一采銀蓮出海去

芙蓉

錦幅雲煙曾點眼三峰晴雪再寒心玉端應被山靈  
文枯墨殘夢裏到今

錦倉

神殿層々掉彩霞誰番想昔在豪華天王已誌文侯  
命晉國終開趙孟家海面朝歸波極月窟前秋瘦草  
豆花彼哉立馬祠門外輾出當年八葉車

觀賴朝肖像

白旆一出豐雲從終見衣冠耀祖宗謨道同根塵中  
豆養成三馬勢如駭

滑川懷昔砥藤綱事

幾未薪材蕪你煙英雄過激也堪憐他年節候一人  
手撈得乾坤三數錢

宿金澤

盪嗽開窓坐覽之愁懷万里海天長飯粥噉芹平魚  
槳落月搖波入蠟燭永夜不眠唯在枕殊秋為客又  
思鄉江門指倒門時近散水雪山是總房

箭渡詣新田社

騁每一逝楚江長其奈蛾眉盪鐵腸苦竹數竿人不  
見罪々湘雨祭昭王

卷八

肝膽消磨尽人生息物幸關山終生路詩屋暫為家



秋白瀾川月春紅赤草花日探行果必不使客愁加

鐘葵驚劍番

不斬揚州吳祿思閑看宇內毒氛埃怪君捕鬼誇微  
物一矧還求善價來

題防火隊番

凌薩士酬奧士白及能未臨可死草表班之點燧痕  
音蹤盤皆警警紫怪休到達人詔言粗莽在神田內  
以市

胡元敗沒番

羯灼吞南宋竟驤薄入清神風時借手一掬報匡山

函谷鷄鳴番

鳴鷄嗶々夜未央能使君公腹皮狐袍借關門收手

去不須餘力借懷王

乳狼吠月番

怪急千天月拳斑下有識狼求官選吸谷群兒呼不  
到獵声昨夜入前山

扇

猪身竹骨細裁成一柄高純曾軟輕嬌秀驚秋空女  
恨仁風誓別使臣情歌唇半掩雲黑影舞袖微搖月  
有声肯以百錢論定價芳題当認左車名

暖眉小全京

叩飯相呼出破卸醒來似曾早寒稠半林曙月殊鴉  
脊一路霜風襲馬頭鐘聲有声知寺近邱山正影見  
雲詩情萬斛時停裏與賞小全京上秋



觀野馬

滿原枯草碧蹄高又及霜風燥鬣毛野性未知猶豈  
味人間何處九方尋

曾美人

冷翠團圞捏得工玉人兀立水晶宮衣香釵卻寒梅  
香鬢影玲瓏凍月中誰是紅情通曉夢香猶白面怯  
春風曝車一片踰壘去已証生前色即空

醫戒錄示高鳴佩亦京村閑客等

黃髮鬢新奇漢法三精數主張其一偏排擯何噴々  
譬若一株梅休論花紅白

杏壇老先生某書有某題書初盈山下重茵誇饒台  
蚤暗善五車未知眩三折

平生不讀書安親古人室古鋒蓋萬豪所學只口實  
僥倖張山戶難效仁之術

明皇夜遊番

一曲清平暗斷魂名花傾國暖春園君王貪見笙歌  
月又看秋風滿蜀門

西行拋飯猫番

嗟見群兒交路喜銀毛出袖舞飄々天山嘗腹誇魚  
去肯向人間捧一猫嗟蓋笑之誤

大石良雄

驚教生毛去未開妓捧春宴暖金杯准看當日伴狂  
酒醉魚仇門濶士未

放魚



鴨頭風暖墨輕漣  
團團看他果已全  
卜夢劉郎長受  
報役人子產  
豈其賢  
桃花流水春十里  
楊柳孤舟雨  
半洲  
此際喚喝生事  
是竟門清勢捲蒼天

放曠

甲仙居然似乞哀  
可堪賣味就燔煨  
誰番公子至  
賦必能為秦人逐  
瘴瘴未減戶林風  
腥著細坡樓夜宴  
暖金杯  
不如五列童王府  
掛灰橫行乞禍胎

放曠

許汝千秋浩氣舒  
慙慙回顧竟何如  
寧期受報纏金  
印  
只乞酬恩負洛書  
一路芥泥長曳尾  
羊汀荇藻伴  
游魚  
他年若你清江使  
託託吾人尚有務且

寄懷高鳴佩

萬里歸來女應知  
都山消息日書其  
離愁一片五人  
管衣兩珠燈秀醒時

夜雨殊燈秀醒時  
微吟憶起去年詩  
東橋夜雪同花  
醉踏破陽川月半坡  
古二句古詩

踏破陽川月半坡  
踉蹌自改到家遲  
朝吟暮醉君兼  
亦不是詩痴定酒痴

不是詩痴定酒痴  
鸞邊花畔日追隨  
第幾條作西奴  
討萬斛酸愁賦別離

萬斛酸愁賦別離  
吳山楚水似天涯  
家江幸有鱸魚  
美恨不教風捧一危

恨不教風捧一危  
午把芳翰恣寫悲  
欲成憂和心還  
沒  
秀筆三由述所思



花筆三由迹竹思音書聯報再遊期一身萍轉君休  
嘆萬里飯未久恙知

古寺觀花

色即空夕不復終用花細澗應禪惟管破陽春三限  
恨瞿曇堂畔菜西施

懣婦

新銀繩帶不知愁幾束紅楓簷上秋畫錦歸去未存  
事霜風吹白老奴頭

春留

毀其一奈雨如煙瘦破閑人倚柱眠應有鶯聲乘暖  
去管公翻畔落梅天

野風

終夕掩扉上淇梁盡感漫誘伎倆長何以伽藍金碧  
裡紫衣錦帽坐禪床

私戲

六曲屏圍巧影新梨花院落不堪春明眸相見相差  
改猶是平生及目人

雜言

天祖遺言即六經神佛效契現三形却遭老衲窺閑  
地一部粉然道代靈

病入膏肓不可醫顧其言行有深哉願為大劑三采  
氣一瀉書生肥血未

西貢寺觀楓

阿彌陀佛并嬌面赤色赤芝杖滿檐詩塵頓積多年



秀玉女未鈞七宝簪

謝安圍碁局

報道貝曹奏凱歌  
手談誇客復如何  
一鷺飛摧万鴉  
隊風聲雀啜不爭多

岐阜懷古

大野遙迤控帝鄉  
城樓百雉曰金陽  
可惡駿將未昏  
宇其奈豚兒事  
閭瑯山勢依然猶  
北面河流何不住  
東方恩波一洗英雄恨  
嘉号当年下廟堂

看劍

一條寒水恨悠悠  
曾向邊庭殪大讐  
好是龍吟人不  
管山村春雨代耕牛

辛未除夕貧甚戲作

我是前身塵耗鬼  
剛須飢渴泣妻兒  
壁前例掛鐘葵  
像迹却自家還不知

觀蘇雜詞

玉<sup>州</sup>八刀痕一夢  
哉惡緣重上及魂  
臺秋波斜送當年  
恨水四津潮去復來

共三郎

紅影綠舞醉如狂  
一片蒸肝吹酒香  
東路探春期欲  
迎衣邊乞試捉迷藏

由良之介

不破關

誰使清芝屬等閑  
天顏一笑轉車還  
風情千載留佳  
話花月秋寒不破關

將物語

東隣置酒話南隣  
不意關人禁所人  
一樹梅花誰管



須香煙吹結二洲春

渡我琵琶湖

岳川之月墨川花之月場中兩鬢華落曉江湖身未  
死載得殊秀渡我琵琶

從西京乘大坂瀛車中作

百里行程勝檝多煤煙捲地曠時過詩情力解双眸  
開奈以山奔水走何

鶴素軍風一鼓擊去鴻毛跡草葉之天王山以奔雲

絕句 絕句 絕句 絕句 絕句 絕句 絕句 絕句 絕句 絕句

○明治十家絕句

序

詩林明治記時也往時有文政十七家天保三十六

叢書子曰鴻仙集林澤注  
實稱也以其考終

家之選而後嘉永中政廢應詩隨時而相繼出於世  
則明治之詩亦莫得不出於世哉蓋詩之興於世  
也尚矣時有否泰 亨政有醇和慘黯詩足以見之  
國風之詩可以徵矣政之詩自為文政之詩天  
保之詩自為天保之詩嘉永政廢應之詩自為嘉  
永政廢應之詩則明治之詩亦莫得不明治之詩  
視之哉余自始知讀書負笈未聞都水師及寒暑苦  
勵資罄備書衣食繼而奔走於二毛之間責譴誘以  
計生其中蹇如星也己而獲官資從使於萬里海外  
疾長風破巨浪局宇始伸氣虹才吐 官羈拘束左  
右所取皆薄領擬擬使焉若不能終日其抑屈又如  
是也自罷官十年筆耕研食菜蔬 飽之艱寒煮之



資自適一室之中琴書香燭超然外形歛回頭往事  
其憂與鬱舒相懸如天壤豈非吾時始亨者耶嗚呼  
吾二十五年間其所遇之變移如是以推之茫茫亦  
七十年五故物變其否泰亨醜知慘澹可知矣其  
世詩人輩出迭所遇各不同所發亦不能不異則  
由一世之詩而足以知一代之變矣然則明治之詩  
豈其徒然也哉或曰明治十家皆江湖間爾自吟自  
咏何謂於在子曰國風之詩取諸里巷不擇野人女  
子蓋觀民風而知政事云爾今十家之詩豈出于斯  
句短篇亦靡不觸境揚懷感物舒憤則其一吟一咏  
亦靡不為觀風知政之具焉又庸得謂不窮於在子  
類衣冠之人懷於勢威誇於利祿詩卷垂成山已非

性情視之十家之詩其所與何如哉窮在野未徵  
序遂為言之明治十一年二月小舟岳書

詠史

大樞 鑒錄

怡之色養只承顏母在畜養取九靈六十餘年高太  
子曾兵燹隙見其間

調理如羹助廟護儒門古鼎古未五可憐未路青輝  
在終被藤家紫奪先

蕩尽厨山鉄蒺藜漲天神火卷風難可憐長炊專車  
骨六郡山河三处埋

巫山南指萬峰間天下真成容座難且借巖陰供假  
疾松風拂露御衣寒

賈櫝還珠天子仁費姬也喜嫁忠臣大夫須曝河也

名清崇字士廣別号  
受石翁又號紫山  
台人移居東草山  
之山



骨忍你春園寺裡人

觀疏球人未朝

遺恨千秋尚未消  
鵬程三際海遙之如  
教藩祖志全就今日  
并觀呂宋朝

春尽拜先人墓

東禪寺古鐘煙霞  
牙樹五人墓徑斜  
喚起三十六春秀幾  
行幽淚灑殘花

赤松山

双松對立翠交枝  
妾舍君身欲說誰  
如使斯心容易  
更海清又有歸山時

望嶽詩

衡寒早起生新晴  
正是三竿海日生  
一帶遙山迷曉

鸞蓮峰戴雪独分明

自是扶桑出一山  
群峰羅列彩雲間  
尊其瞻視儼坐  
立似坐九重朝百蠻

山橫麓有翠為低  
嶽雪當天望不迷  
八面玲瓏五道  
隱夕陽未度劍峰西

卜居

小野 湖山

不須江上着漁簑  
不用山中鎖薜蘿  
教卜閑居何處  
好東京城裡故人多

詠史

見機投變是英雄  
恩怨剛來一笑空  
無限當年遊說  
士誰如范叔善全終  
不忍池新雜吟

○名長忽字侗籍人  
号狂々老丈也江人  
与甲戌生



先雅而起尚嫌遲客看清晨景物奇  
方系錦苞初綻  
必一轉紅日未昇時  
霞滿論古李西涯道字作詩陳白  
破有時吾亦仰  
耳宗派終歸老浣花

又題

六十年前一刹那箇翁不取辛  
尤多厚構海市朝  
現遊笑同盟奈汝何

熱海溫泉雜詩

市郭東西幾里間  
双峰斗出海  
即灣葉正寺裡暮鐘  
響鳥帽岩前漁艇還  
少樓呼郊山仙臺浴罷欄前  
倒奉杯因病得閑  
發不  
惡况吾年病得閑未

遠鄉絕句

吾親焉沒右  
昔師吾師思存  
吾母恩遠  
携吾妻拜  
吾  
婦一壘春色  
笑声温  
某如某水  
依稀在春  
去春未  
曾眼中  
楊女尹  
賢吾豈  
比故人  
贈或似  
韓公

神武天皇

大沼 枕山

遠句難波  
垂鮎鱸  
旅誅巨賊  
定中區  
須知真個  
天孫  
貴照路  
前軍布日鳥

日本武尊

叢雲一氣掃  
群靈  
豈障康  
臨瑞氣  
紅却是  
千秋人  
感  
廷  
吾  
儒  
已  
矣  
誌  
吾  
多

徐福

○名孝字子壽別号  
應之堂江都人又政  
元年中尚生



水真為名避暴秦子男女獲一固身扶桑家似蓬萊  
好應笑桃源引世人

和氣清麻呂

丈夫何敢畏驕兒及得良朋激厲言一任朝庭呼做  
穢能令清氣滿乾坤

在京行乎

納言歌詠三他嗜諷在須臾亦一清到音心如秋浦  
月松風竹雨是塵聲

菅原公

夏天疾疢屢留廳公所不知人亦驚好是梅紅松翠  
裡廣鑿台笑獲皇京

源為朝

碧瞳推髮孰當君長箭破他孤鳥雲令子舞天王爵  
貴純勝乃煙鞭將軍

僧西行

詠句芙蓉東又東偶訪蕭零暮營中出門喜見思曹  
戲入手銀燭空手空上空轉之得

思嶋三郎

殊學著意待忠良行在雪閉月放之白樹題詩疑立  
久風簾捲起落衣香

柳正行

行宮奏事踈山雲為揭喧蕭皇意飯法策此時還可  
忽生遠臣志死遠君

小早川隆景



進乎朝野取敵師退乎茲繁教者民乃多兮習也私  
怒冠紳當時戒後人

石川大山

阪上失登不賢情洛也高隱且娛生豈不觀叙五  
暇莫怪雜手類入城

大臣威武歌

森 春濤

○名魯直字希黃一  
字方大尾張人住東  
京文政二年己卯生

大臣威武大從容樽俎之間輒折衝旗影紅搖東海  
日天津水亦欲朝宗

齊七十餘城不盡淮陰善戰未為奇滿清收版一  
下誰敢近儒鄣會其

都督凱旋歌

論彼兵復器太溫特令降虜感皇恩功名不讓哥舒

翰平定生蕃勝吐蕃

萬方一籌制汝鯨絕悔長傳都督名春與皇威不相  
及壯毋索即受降城

詠史

鴻業千秋留汴河錦帆南去敗雄波異他神禹論功  
利御道春風種極多

讀晉書

機也見機何太遲李鷹歸興一帕孤惜君徒憶華亭  
鶴不憶秋風湖上鱸

一將三諫為丞掾文用清諫考廟謨持論蚤當勢難  
救一篇崇有不如此

思于山川荆棘多已歸獨索兩摩挲可憐陽解撫林



嚴正規信門詞彙賦



